

意見陳述書

2016年 12月5日

原告 志田弘子

1 七尾市の志田弘子と申します。能登に魅せられて移り住み、友禅を生業として40年近くになります。10kmのところの原発に、不安を持ちながらの子育てを終え、娘が母になる時、大きな喜びと共に、この娘は、今から身をもってこの小さな命を守っていくのだと思うと、いとしさがこみ上げてきて、胸がいっぱいになったことでした。

2 「はじめまして」は、そのいのちに出会えた喜びを染めずにはいられなかったものです。

どれだけ不思議で有難かったか・・・どれだけ幸せに、と願ったことか・・・その絵の前で”同じやった・・・”と立ち止まってくださる方達に出会えた頃から、”脇道でいい、この方向へ・・・”と、手探りながら歩いてきました。

2011年、東日本大震災での原発の惨状は、“地域の発展のため”と逆らえない呪文に口を封じられ、安全と信じ込もうとしたものが、“まさか、こんなにも脆いものだったとは・・・”と、深い憤りに言葉を失いました。

3 「みんな、どこへ行った」という1枚は、小さな女の子が、花や木々や動物たちと、水の中を流れてゆく絵です。失われた多くのいのち、故郷を奪われた数えきれない人達、つながれたまま、飼い主を、食べ物を待ち続け、飢えて逝った優しい瞳の動物達 ”みんな、みんな、どこへ行ってしまったのだろう “染めながら鼻の奥が痛み続けました。

4 震災の後、血を吐くような福島からの叫びに、胸が震えました。

「私たちは捨てられたのだ。」 「私たちは、今、静かに怒りを燃やす福島の鬼です。」

それはそのまま、いつの日かの能登のことであり、各地で、国策に口を封じられ、踏みつけにされた者達の叫びです。「鬼となりても」は、この能登にも、日本中にもいる鬼・・・“どうか子ども達を奪わないで”と、髪を逆立て、まなじりを吊り上げてかき抱く、母親達の姿です。

何もできぬままの無力感の募る日々・・・、庭先の低木の上で、焦げつくような日差しにも、飛ばされそうな風雨にも、卵を庇い、座り続ける母鳥を見ました。ある日、大きな鳴き声に驚いて外へ出ると、その身をかけて守りぬき雛が孵った喜びに、全身を震わせて歌っていたのでした・・・その誇らしげな姿が眩しくて、顔があげられませんでした。私たちは守っているのだろうか・・・

5 「三春の滝桜」に出会えたのは、染を元に作った冊子をリュックに詰め、福島を何度か訪ねていた折でした。何者かが棲んでいるような大きな存在感に圧倒され、染めたいと願った、その数えきれない花びらを描いている時に、樹が話しかけてくれたのでした。

「大きな風に、凍える雪に、わしはずーとここにいた。人間達の愚かさも、人間達の優しさも見続けながら、ここにいた。大地に根を張り1000年たった。諦めずに願い続ける・・・本当に豊かなものはいのちだと・・・めぐりめぐるいのちこそ、未来に続く希望だと、人間達は、いつかはきっと気付いてくれる・・・」 救われた気がしました。 そうなんだ。諦めてはいけないんだ。

6 国策という庇護のもと、莫大なお金を注ぎ込み、誰も責任を取らない、たらいまわしの原子力行政、隠し通そうとする事故の数々、数え切れぬ人為ミス・・・地震国の日本、ましてや活断層の上での、綱渡りのような危うさの中、明日の日さえわからないのに、原発を、再稼働を許し、何万年も管理できるとは・・・見えない毒は、内から外から身を焼き、大地を奪い、水を奪い、空気さえ、奪うのに・・・この身に代えても、と願う子ども達を守るどころか、じわじわと絶望へと追い詰めているのは、果てない消費に浸りきった、私達なのです。

能登は、海も、山も、大地も、陽に輝き、風が渡り、鳥達が舞う、匂い立つようないのちの場所です。あらゆる恵みに感謝し、分かちあい、暮らしを紡いできたところです。すべてのいのちを大切につないできたところです。そして、それは福島もそうでした・・・。

それらがどれだけ、真の豊かさに満ちたものなのか・・・どれだけ、かけがえのないものなのか・・・

消しようのない放射能に、触れることも出来ない豊かな恵み、打ち捨てられた大地・・・取り返しのつかない哀しみと、行き場のない怒りの中で、痛い程に感じています。

小さな鳥でさえ、もの言えぬ樹でさえ、いのちを繋ぐことにその身をかけているのに・・・

すべてを断ち切る魔物と知りつつも、しがみつく行く手に何をかけようというのか・・・

守るべき国が、企業が、見せかけだけの豊かさを追いかけ、弱い者を踏みにじり、先を見ないあまりの愚かさに、時に挫けそうになります。

けれど、多くの哀しみを経て、ようやく一人ひとりが、追い求めた豊かさへの過ちに気付きつつあり、流れは確かに変わりつつあります。原発に頼らない生き方を求める声が、世界中で高まっています。

7 孫たちを見守る年になり、野原を駆け廻る子ども達を傍らに、”ここにこんなに豊かなものがある“と、胸迫る思いと共に、生きとし生けるものに満ちたこの能登を・・・喜びに、苦しみに、変わらず育み続けてくれる、揺るぎない地を手渡したい、と心底思います。

大切なものを見失って、多くの絶望を生み出してしまった私達の世代・・・月日を重ねてなお癒えない涙の中で、その生き方こそが問われている今・・・

もう繰り返してはいけない・・・もう奪い尽くしてはいけない・・・幸せを求めて産声を上げる子ども達に、見えぬ毒に怯える絶望ではなく、いのちへの希望こそを、手渡したい・・・

諦めないで・・・そのためにこそ、私達はいるのだと・・・

その、道しるべを打ち立ててくださる司法の力を・・・

未来に生きるもの達と共に、心からの願いとして、陳述とさせていただきます。

以 上